

談 話 室

アイルランドの大飢饉, 1845 ~ 1848

—ひろい読み—

滋賀県立大学 ^{たじ} 恒 ^み 見 ^{あき} 明 ^{とし} 俊

は じ め に

農林水産省(草地試験場環境部)を定年退職してすでに8年が経つ。滋賀県立大学で「植物病害防除論」という講義を担当して、植物病理学の萌芽期の出来事としてのアイルランドのジャガイモ飢饉とセイロン島のコーヒーさび病について触れないわけにはいかない。セイロン島にコーヒーさび病が発生してコーヒー園が全滅し、すべてがアッサム茶園に替わった。その結果、英国人は紅茶を飲むようになったという話が分かりやすいが、イギリス人の紅茶好きについては、セイロン島のさび病発生を無視して論じた本もある。その点、ジャガイモ飢饉については、ジャガイモ疫病の発生を無視することはできない。しかし、西ヨーロッパに広がったジャガイモ疫病が、なぜアイルランドだけで悲惨な結末を生んだのか、頭の中に常に疑問を抱きながら講義を続けてきた。

私はジャガイモ疫病菌 (*Phytophthora infestans* (MONTAGNE) de BARY) には馴じみが薄い。北海道農業試験場在職中に、向かいの研究室で佐藤章夫博士や加藤雅康君が扱っているのを眺めていただけである。大先達の高桑亮博士は、大飢饉から150年後を記念して1995年9月にダブリンで行われた「Phytophthora 150」に出席された。そのご報告(高桑, 1996)を私は興味深く読ませていただいた。

2005年夏、私は国際草地学会議でアイルランドを訪れ、ブレコングレス・ツアーで西アイルランドを回ることができた。今ではジャガイモの栽培を眼にすることはまれであった(図-1)が、大飢饉(The Great Irish Famine)についての出版物を入手することができた。UCD (University College Dublin) の学生寮に宿泊して、夜はもっぱらこれらの本をひろい読みした。その結果をまとめてみたのが本文である。

I 飢饉前の農民の生活

アイルランドへジャガイモが渡来したのは1586年と

The Great Irish Famine, 1845 ~ 1848. By Akitoshi TAJIMI
(キーワード: ジャガイモ疫病, アイルランド, 大飢饉)

いう説(加藤, 2004)があるが、とにかく1600年代には栽培が広まっていたらしい。小麦の栽培ができない狭いやせ地でもよく育ち、特殊な農機具も必要ないので、小規模な農家にとって理想的な作物であった。飢饉の前までのアイルランドの3分の1の家庭の食事は、ゆでたジャガイモと少量のベーコン、それに少量のミルクであった(DALY, 1994)。

全国で毎年およそ1,500万tのジャガイモが生産され、輸出分を除くとその半分以上が食用であった。アイルランドの成人男性は1日6.4 kg, 女性と若者が5.1 kg, 子どもでも2.2 kgを消費していた(TÓIBÍN and FERRITER, 2001)。

飢饉前の人口は810万人で、現在の530万人と比べると著しく多かった。国民の7分の6が農村で生活していた。1845年には農家のおよそ32%が10 ac未満の小規模で、さらに土地を持たない農家が41%に及んでいた。土地を持たない農民は家族を含めると225万人を超えた(TÓIBÍN and FERRITER, 2001)。ランドロード(landlord)から住居と耕作地を借りて生活し、飢饉時には追い立て(eviction)の対象となった。

II ジャガイモ疫病の到来

ジャガイモの異変は1845年6月下旬にベルギーで起



図-1 アイルランド西部にあるカイルモア修道院のジャガイモ畑。農薬散布中らしいがお昼時で人影はなかった

こり、オランダとフランスへと広がった。7月下旬にはベルギーの異変が糸状菌によることを示唆する報告がなされている。8月20日にはモレン (Charles MORREN) も糸状菌説を強く支持した。8月16日からの1週間で異変はイングランドの南部全体にも広がった (NELSON, 1995)。

ここで紹介するのは200年以上の歴史 (1795年設立, 1800年から一般公開) を持つアイルランド国立植物園 (National Botanic Garden, ダブリン近郊の Glasnevin にある, 図-2) で購入した小冊子からで、当時の学芸員で権力も資金力も持たないムーア (David MOORE) がジャガイモの異変の原因解明と対策に立ち向かって行った研究を解説したものである。

植物園のジャガイモに異変が起こったのは1845年8月20日で、ムーアは早速観察を行って数種の糸状菌を認めた。なお、当時最も広く栽培されたのは Lumper という白花の品種だった (NELSON, 1995)。

異変の原因については、モレンが支持した糸状菌説と糸状菌説を否定して、夏季の天候の異常がもたらしたなんらかの生理的要因という説とが拮抗していた。生理的要因説の背景には、ジャガイモが栄養繁殖を繰り返されてきた作物なのでなんらかの劣化現象が現れても不思議はないという考えが根底にあったようである。8月31日にパリでモンターニュ (Charles MONTAGNE) が異変の原因は糸状菌の一種 *Botrytis infestans* であると発表した。発表に先立って彼はイングランドのパークレイ (MILES J. BERKELEY) に標本を送付した。パークレイはイングランドの標本にも同種の糸状菌が認められたことから、*Botrytis* 説を支持した (NELSON, 1995)。

一方、生理的要因説を支持したのは、Chiswick 王立園芸協会植物園の Assistant Secretary でかつロンドン大学植物学教授のリンドレイ (John LINDLEY) であった。彼はまた *Gardeners' Chronicle* の編集者でもあったので、9月20日の同誌に載ったパークレイの糸状菌 *Botrytis* 説支持の報告を激しく否定して論説した。しかしリンドレイは、このジャガイモ異変がアイルランドに重大な危機をもたらすことを危惧した最初の1人でもあった (NELSON, 1995)。

さて、ムーアは観察によって数種の糸状菌を見出したものの、主因とはせず、これらの糸状菌は他の原因で植物が弱ったときのみ侵入すると考え、大勢に従ってリンドレイを支持した (NELSON, 1995)。

10月中旬にはアイルランドのすべてのカウンティで異変が発生した。アイルランドでは3人の委員による対策委員会が組織され、そのうちの1人はリンドレイであ

り、糸状菌説を支持する委員はいなかった。農業実務者を委員に加えるべきとの意見が出されたが、メンバーによって拒否された。委員会は、①被害を受けていない塊茎の保存方法、②被害を受けた塊茎の利用方法、③被害を受けていない種いもの入手方法、の3点について諮問され、11月に答申した (NELSON, 1995)。

答申には、湿気は病気を助長し、乾燥は遅滞させるので、地中の塊茎は直ちに掘り起こし、被害を受けていないもののみを保存するという、この時点までのムーアの研究結果が盛り込まれた。しかし後にムーアは、腐敗はどのような保存条件下でも進展すると修正している。ムーアは、当時主張された他のいくつかの原因についても対応する実験を行わなければならなかった (NELSON, 1995)。

1845年冬から1846年春にかけてもムーアは実験を続けた。4月14日に王立ダブリン協会とパークレイとに送った実験報告書の最後に、ジャガイモの異変が今年 (1846年) もすでに現れたことを記した。ムーアは種いものを硫酸銅に浸漬する実験も行っている。

パークレイからの返事を読みながら、自分の実験を振り返ってみて、被害塊茎から生じたジャガイモには冬季の温室内でも異常が起こっていたことに気付いた。夏季の天候異変とは係わりがないというこの発見が彼の迷いを一瞬にして消し去り、一転してパークレイの糸状菌説に同調することになった。7月29日付の書信でパークレイに陳謝することになる。ムーアの転向はリンドレイをいたく驚かせた。リンドレイは、自分たちの考えは今も変わらないが、ムーアの今後の研究を見守ると述べている (NELSON, 1995)。

ムーアがジャガイモ疫病について行った実験結果を要約すると、①種いものを硫酸銅などの薬液に浸漬するだけ



図-2 ダブリン近郊グラスネビンにある国立植物園の大温室 (Great Palm House)。写真には撮り難かったが、この植物園は樹木園もすばらしい

では効果がない、②病徴は地下部から発生し、しだいに茎葉に上っていくが、進展は急激ではなく、胞子も認められない、③胞子を作り始めると腐朽が急速に進む、などである (NELSON, 1995)。薬液に浸漬するだけでは不十分ということは分かったが、茎葉散布にまでは当時は頭が回らなかった。

また、ムーアは、オーストラリア産の *Anthracercis ilicifolia* がジャガイモと同じ病原菌に侵されることを認めた。これはナス科の他の属の植物もジャガイモ疫病菌に感染することを認めた最初の報告となった (NELSON, 1995)。

ムーアがパークレイやリンドレイにあてた書簡はすべて保存されている。一方、パークレイがムーアにあてた書簡は散逸した。この小冊子はこのような資料を基に作成された。ムーアはほとんど無名の人である。宮仕えの身で、学問上対立している 2 人の巨大な権威者の間にあって、そのどちらも良好な関係を保ちながら研究を続けたムーアの苦労を垣間見る思いがする。

III 飢饉の経過

ジャガイモ疫病の発生が始まった 1845 年には、生産量が 3 分の 2 になった。多くの農民は、イングランドが差し入れたトウモロコシを買うことができた。1846 年はジャガイモが不作であった。農民は食料を買うための蓄えを持たなかった。イングランド政府は道路の補修などの仕事を与えた。しかし、この計画に対してアイルランドは増税を行わなければならなかった。1847 年、ジャガイモはまたも不作だった。これは前年に種いもまで食べざるをえなかったためでもあった。1848 年にも疫病が発生した (TAMES, 1995)。

この間のジャガイモ生産量を見ると、飢饉以前の 1844 年を 100 (14,862 千 t: 推定) とすると、1845 年が 68, 1846 年が 20, 1847 年が 14, 1848 年が 21 となる。作付面積は 1844 年比で、1845 年が 106, 1846 年が 84, 1847 年が 12, 1848 年が 34 で、1847 年の生産量の低さは作付面積が著しく減ったことによる。1847 年の単位面積あたりの収量は 1844 年 (推定値) の 115% に増えている。生産されたジャガイモの 50% が人間の食料に、14% が種いもに、36% が家畜の飼料に用いられてきたが、1846 年には種いもまでが食料に回った。1846 年 12 月から 1847 年 1 月が食料の価格が最も高騰した時期であった (DALY, 1994)。

ジャガイモ疫病が発生した後も、農産物の価格はジャガイモと豚肉を除いて安定していた。例えば小麦の価格は 1845 年比で、100 (1845 年) — 134 — 100 — 89 — 67

(1849 年) と推移した。大麦も 100 — 148 — 98 — 85 — 72 で、どちらも 1846 年には高騰したが、以後は安定した。しかしジャガイモは 100 — 367 — 289 — 332 — 244 と高値が続いた。また、豚肉は 100 — 127 — 162 — 125 — 96 と 1848 年まで高値が続いたが、牛肉、バター、マトンはきわめて安定していた。例えば牛肉は 100 — 101 — 102 — 107 — 77 であり、マトンも 100 — 100 — 104 — 100 — 88 であった。豚肉の高騰は餌となるジャガイモの不作と高騰に連動したもので、小麦や牛肉など当時の農民とは係わりのなかった食料の価格には変動が少なかった。代替食料としてのエンバクだけが 100 — 158 — 91 — 166 — 70 という動きをしている (DALY, 1994)。

穀類や家畜の輸出も 1846 年から 1849 年の間も続いていた。ただし、豚の輸出は 1847 年以降激減した。食糧の輸出は 1846 年の秋に突出しており、もしこれがアイルランド国内にとどまっていたなら、ジャガイモの不作が明らかになった 8 月から、救援のトウモロコシが届いた冬季までの期間のつなぎの食料になったのではないかという見方もある。アイルランドの大飢饉は単に食料の不足によるものではなく、価格の高騰が大きな原因となった。最少量の食料さえ入手できなかった極貧の農民がいた反面、現金と洞察力とを駆使して儲けを手にした大型農家すらあった (DALY, 1994)。

IV 飢饉博物館

アイルランドの歴史家は、一般に、飢饉の歴史に心を動かされることが少なかった。どこの国の歴史家もそうであるが、他人に罪を着せるようなことよりも、感動的な言葉や引用を記述したり解析したりしたがるものである。移民の末裔でウィスコンシン大学歴史学教授のドネリー (James DONNELLY) など海外の歴史家に触発されて (TOIBIN and FERRITER, 2001)、大飢饉を見つめ直す書物が多数出版されている。大飢饉の頃の農民の生活を描いた絵本もある (WILSON, 2000)。

加藤 (2004) は、最近のアイルランド農業を紹介した文中で、1994 年から 1997 年までに刊行された大飢饉を紹介した参考書 4 冊を挙げているが、これらは今回私が入手した中には含まれていない。大飢饉を見つめ直し、伝えていきたいという機運がますます高まっていることを感じさせる。

このような動きの中で、ロスコモンに飢饉博物館が開設されていることを知った。ぜひ訪ねてみたかったが、今回は機会がなかった。しかし、なぜロスコモンなのかという疑問が、開設を知ったときから湧いて消えなかった。ダブリン空港のインフォメーションでロスコモン・

カウンティの観光案内を購入してその顛末を知り、他の出版物にも当たってみた。

飢饉博物館 (Famine Museum) はロスコモン市ではなく、およそ 18 km 北のストロークスタウン (Strokestown) に開設されていた。ストロークスタウン・エステートのランドロードであったデニス・マホン (Denis Mahon) は彼のテナントの 3 分の 2 を追いたて (eviction) と強制移民によって放逐しようとして暗殺された。そのマホン家が 1660 年代から 1979 年まで所有していた屋敷と庭園が飢饉博物館とともに公開されている (イースターから 10 月 31 日までの期間)。

デニス・マホンはいとこのジョン・マホン (John Ross Mahon) を雇ってエステートの運営を相談した。ジョン・マホンはレンタル料を期待できないエステートの住民の 3 分の 2 を減らすよう忠告した。強制移民には費用がかかるが、貧農を宿舎に置いておく半分の金額で済むとも教えた。多人数の貧農を抱えた他のランドロードと同じように、デニス・マホンは土地管理人 (land agent) に変身した (Ó Cathaoir, 1999)。

ストロークスタウンの救済委員会 (Relief Committee) で神父のマックデルモット (Michael McDermott) は、テナントが飢えに苦しんでいるとき、デニス・マホンはロンドンで遊興していると咎めた。デニス・マホンは自分の資産を使って自分が何をしようと勝手だと思う。私事には干渉しようとしなくてほしいと言いつつ (Ó Cathaoir, 1999)。

デニス・マホンはロスコモン管理委員会 (board of guardians) からの帰途、Doorty という地で撃たれて死んだ。彼の死はこの秋 (1847 年) に起こった 6 件あまりのランドロードまたはその代理人の暗殺または暗殺未遂事件の一つであり、紳士階級への警告となった (Ó Cathaoir, 1999)。

暗殺に先立つ日曜日のミサで、マックデルモットがデニス・マホンはクロムウェルをしのぐ悪人で、しかもまだ生きていと述べていたと報道され、センセーションを巻き起こした。神父は憤然と否定し、いかなる祭壇においてもデニス・マホンを非難したことはない。しかし、事件の原因はただ一つ、借地人に対して気まぐれかつ不必要に遂行された下劣で非人間的な残虐行為に対するもので、彼らは飢えと伝染病だけでなく、追放された縁者を失ったことから悲惨で報復的な感情に達するまで傷ついていたのだと述べた (Ó Cathaoir, 1999)。

ブラウン司教 (George Browne) も、マックデルモットは神父の立場にもとる行為は何も行っていないと断言し、デニス・マホンの代理人によって追放され、そのほ

とんどがすでに亡くなっている 3,006 人のリストを提出した (Ó Cathaoir, 1999)。

3 人の容疑者が逮捕された。そのうちの 1 人、もぐり酒場経営者のハステイ (James Hasty) はロスコモンの 4 千人の群衆の前で絞首刑に処せられた。マックデルモットへの咎めはなかった (Ó Cathaoir, 1999)。

V 移 民

追いたて (eviction) と移民 (emigration) とは大飢饉の副産物と云われている。デニス・マホン暗殺の背景にも、レンタル料の清算 (rent strike), 退去処分 (clearances), 強制移民 (forced emigration) およびコフィンシップ (coffin ship: 直訳すると棺おけ船) が挙げられている (Ó Cathaoir, 1999)。前二者は追いたてと、後二者は移民と関係する。追い立てによって住居を失った農民が路傍で餓死または病死したことが語り継がれている (Tames, 1995)。

私の講義では 100 万人が餓死したと話してきた。実は死者の総数が 100 万人ということで、本当に餓死した人の数は 2 万人程度らしい。飢餓から来る水腫でさらに 2 万人。壊血病で亡くなった人が多かったという指摘もある。救援食料のトウモロコシにはビタミン C が欠けていた。ジャガイモを常食にしていると壊血病とは無縁なので、この病気に対する知識が乏しかったらしい。さらに多数の人はチフスや赤痢などの伝染病で亡くなった (Daly, 1994)。

私の講義ではさらに 100 万人が海外へ移民したと続く。1845 年から増え始めた北米への移民は年毎に増大した。大飢饉後も続いて 1851 年と 1852 年にピークを迎えた。ひとくちに移民といってもいろいろなケースがある。政府は 4 千人の女性孤児をオーストラリアへ送った。ランドロードも移民を積極的に支援した。移民を支援する費用と農場を長期間維持するための費用とを比べると、移民こそ貧民を追いつきエステートを再構築するための人間的でかつ効率的な方法であると考えられた。大飢饉時の移民の 5% がこのような支援を受けた (Daly, 1994)。

すでに移民に成功している縁者からの送金に頼った者もいた。しかし大多数は、自ら費用を算出しなければならなかった。乗船できる港まで、徒歩でアイルランド島を横断したものさえいた。乗船できても目的地まで到達できなかった人も多かった。ここで登場するのがコフィンシップである。難破による死者は少なかったが、輸送中の熱病 (ship fever) の発生によるものが多かった。船上での食料不足、詰め込み、非衛生が拍車をかけた。

死者が 50% 超えた船もあったという (DALY, 1994)。棺
おけ船と呼ばれる由来である。

デニス・マホンは彼のロスコモンにあるテナント 3 千
人の 9 千 ac のエステートを清算した。彼は 2 千 4 百ポ
ンドで船をチャーターし、千人以上をカナダへ送ろうと
していた。バージン諸島への 9 週間の航海はぞっとする
ほど恐ろしいものだった。グロス島の検疫所へ到着した
とき、476 人の乗客のうち 158 人がすでに死んでおり、
180 人は病気に罹っていた。医師の話によれば、デッキ
に上がって来た者も青白い亡霊のようであった。健康な
ものは 6 人か 8 人ほどしかいなかったという
(Ó CATHAOIR, 1999)。これは彼が暗殺される半年前頃の
出来事と考えられる。

移民は大飢饉以前からすでに始まっていた。アイルラ
ンドの人口は大飢饉前の 1 世紀で 4 倍に膨れ上がり、そ
の後の 1 世紀で半減した。出生率や婚姻率の低下も大飢
饉以前からすでに始まっていたのではないかという見方
もある (DALY, 1994)。

1840 年代に米国に渡ったアイルランド人はおよそ 78
万人と言われている。田舎からの人が多かったにもか
かわらず、ニューヨークやボストンのような大都市に大き
なグループを作って住む傾向があった。都市にローカル
な政治組織を作り、警官や公務員などを志望し、社会の
重要なメンバーになるまでに時間を要しなかった

(TAMES, 1995)。

お わ り に

現在外国で暮らすアイルランド人は 1 千万人以上と私
の講義録には記してあるが、この数字をどこから持って
きたのか今定かでない。私はさらに「The Great Irish
Famine」という出版物を 2 冊 (KINEALY, 2002 ; PÓIRTÉIR,
1995) 入手している。今後、これらも少しずつ読み進ん
でみたい。アイルランド滞在中に療養中の母が他界し
た。この小文を母美枝子に捧げる。

参 考 文 献

- 1) DALY, M. E. (First published 1986 : Second impression 1994) :
The Famine in Ireland, Dundalgan Press, Dundalk, 138 pp.
- 2) 加藤 亘 (2004) : 日本草学会誌 46 : 669 ~ 675.
- 3) KINEALY, C. (2002) : The Great Irish Famine, Palgrave,
Hampshire and New York, 268 pp.
- 4) NELSON, E. C. (1995) : The Cause of the Calamity : Potato blight
in Ireland, 1845-1847, and the role of the National Botanic
Gardens, Glasnevin, The Stationary Office, Ireland, 20 pp.
- 5) Ó CATHAOIR, B. (1999) : Famine Diary, Irish Academic Press,
Dublin and Portland, OR, 201 pp.
- 6) PÓIRTÉIR, C. 編 (1995) : The Great Irish Famine, Mercier Press,
Ireland, 283 pp.
- 7) 高桑 亮 (1996) : 植物防疫 50 : 115 ~ 116.
- 8) TAMES, R. (1995) : The History of Ireland, Gill & Macmillan Ltd.,
Dublin, 32 pp.
- 9) TOIBÍN, C. and D. FERRITER (2001) : The Irish Famine : A
Documentary, St. Edmundsbury Press, Bury St Edmunds, 214
pp.
- 10) WILSON, L. (2000) : How I Survived the Irish Famine, Gill &
Macmillan Ltd., Dublin, 36 pp.

(新しく登録された農薬 4 ページからの続き)

●カフェンストロール・ベンスルフロンメチル・ベンゾビシ クロン剤

21538 : テラガードジャンボ (クミアイ化学工業) 2005/08/31

21539 : SDS テラガードジャンボ (エス・ディー・エス バ
イオテック) 2005/08/31

カフェンストロール : 12.0%, ベンスルフロンメチル :
3.0%, ベンゾビシクロン : 8.0%

移植水稻 : 水田一年生雑草, マツバイ, ホタルイ, ウリカワ,
ミズガヤツリ (東北), ヘラオモダカ, ヒルムシロ, セリ,
アオミドロ, 藻類による表層はく離

●カフェンストロール・ベンスルフロンメチル・ベンゾビシ クロン剤

21540 : テラガード L ジャンボ (クミアイ化学) 2005/08/31

21541 : SDS テラガード L ジャンボ (エス・ディー・エス
バイオテック) 2005/08/31

カフェンストロール : 8.4%, ベンスルフロンメチル : 2.0%,
ベンゾビシクロン :

移植水稻 : 水田一年生雑草, マツバイ, ホタルイ, ミズガヤ
ツリ, ウリカワ, ヒルムシロ, セリ, アオミドロ (関東・

東山・東海を除く), 藻類による表層はく離 (関東・東
山・東海を除く)

●カフェンストロール・ベンゾビシクロン剤

21542 : テロス 250 グラム (クミアイ化学工業) 2005/08/31

21543 : SDS テロス 250 グラム (エス・ディー・エス バイ
オテック) 2005/08/31

カフェンストロール : 8.4%, ベンゾビシクロン : 8.0%

移植水稻 : 水田一年生雑草, マツバイ, ホタルイ, ミズガヤ
ツリ (北海道を除く), ヒルムシロ, ヘラオモダカ (北海
道・東北)

●オキサジクロメホン・ジメタメトリン・ピラゾスルフロン エチル・ベンゾビシクロン粒剤

21544 : シリウスターボ 1 キロ粒剤 (日産化学) 2005/08/31

オキサジクロメホン : 0.80%, ジメタメトリン : 0.60%, ピ
ラゾスルフロンエチル : 0.30%, ベンゾビシクロン :
2.0%

移植水稻 : 水田一年生雑草, マツバイ, ホタルイ, ウリカワ,
ミズガヤツリ (北海道を除く), ヘラオモダカ (北海道),
ヒルムシロ (近畿・中国・四国を除く), セリ, アオミド
ロ, 藻類による表層はく離